

論 説

ポピュリズムとデモクラシー

水 島 治 郎

はじめに

「ポピュリズムは、デモクラシーの後を影のようについでくる」(Canovan, 1999, 16)

近年、先進各国でポピュリズムの主張を掲げる政党や政治運動が躍進している。現代の日本では「大衆迎合主義」や「人気取り政治」とも説明されるポピュリズムであるが、特に民主主義の先進地域とされる西ヨーロッパで、ポピュリズム政党の伸長は顕著である。オーストリア、フランス、スイス、イタリア、オランダ、ベルギー、デンマーク、ノルウェー、スウェーデンなど各国でポピュリズム政党は多数の議席を獲得し、話題をさらうとともに、特に移民政策・難民政策などの転換をはじめ政策に強い影響を与えている。これらのポピュリズム政党は、既成政党を批判するとともに、外国人や移民の存在を問題視する排外主義的主張、メディアを活用して人々に直接訴える政治スタイルなどによって既成政党とは明らかに異なる存在感を示しており、従来の政党政治に飽き足らない無党派層の支持を集めることに成功した。

日本語なので漢数字だが、これは算用数字でもどちらでも良い。また、ここでは最後の文献目録に杉田が一人しかないないので、下の名前まで書かなくて良い。

間接引用の例

《論 説》

特に二〇一四年五月の政州議会選挙は、ヨーロッパレベルでポピュリズム政党が政治の表舞台に踊り出たという意味で、「画期的」だった。イギリスでは英国独立党、フランスでは国民戦線といったポピュリズム政党が反EUを掲げて第一党に躍進した。二一世紀のヨーロッパは、あたかも「ポピュリズムの時代」を迎えたかのような。ポピュリズム研究で名高いタガートは既に二〇〇〇年にその著作で、EUのような国際組織の存在が、ポピュリズムにさらなる展開の可能性を与えると示唆していたが、その指摘がにわかに現実味を帯びてきたといえる (Taggart, 2000, 111)。

直接引用

このポピュリズム政党の出現と伸張に対しては、「リベラルな政治秩序への挑戦」「デモクラシーの存立を危機にさらすもの」、またヨーロッパの文脈では「ヨーロッパ統合の歯車を逆戻りさせるもの」といった批判も多い。その排他的な主張、リーダーと支持者の垂直的な関係、群衆の情念に訴える政治手法などは、デモクラシーを脅かしかねないものを含んでいるとされる (Panizza, 2005, 29)。ポピュリズム政党は、今や「民主的諸制度に対する、重大な脅威として立ち現われている」というのである (Mouffe, 2005, 50)。政治学者の杉田敦も、ポピュリズムを、「多数派にとって不都合な問題をすべて外部に原因があるとすることで、真の問題解決を避ける政治」と述べる (杉田、二〇一三、九八)。また現実政治においても、いくつかの国では既成政党の全てから連立相手として拒否され、連立政権から完全に排除されている。

しかしポピュリズムの歴史をひもとけば、ポピュリズムを「デモクラシーを危機にさらすもの」とする見方は、必ずしも一般的ではない。むしろポピュリズムは、少数派支配を崩し、デモクラシーの実質を支える解放運動として出現した。一九世紀末のアメリカ合衆国、二〇世紀のラテンアメリカ諸国を典型として、既成の政治エリート支配に対抗し、政治から疎外された多様な層の人々、すなわち農民、労働者、中間層、中小企業経営者などの

政治参加と利益表出のチャネルとして、ポピュリズムが積極的に活用された。とくにラテンアメリカにおいて、労働者や多様な弱者の地位向上、社会政策の展開を支えた重要な推進力の一つが、ポピュリズム的政治だったのである。

このようにみると、ポピュリズムとデモクラシーの関係は一筋縄ではいかないことがわかる。むしろポピュリズムのもつこの「二つの論理」を理解することが、ポピュリズムの功罪を理解する上で重要だろう。かつて多様な層の人々の「解放の論理」として現れたポピュリズムが、現代では排外主義と結びつき、「抑圧の論理」として席卷しているのである。

しかも現代におけるポピュリズムについても、「抑圧の論理」ばかりを強調することはできない。たとえば近年のヨーロッパの一部のポピュリズムは、イスラム系の移民批判をする際に、「男女平等を認めないイスラムは問題だ」「民主主義的価値観と相いれないイスラムは認められない」というロジックを展開しており、ジェンダー平等やデモクラシーを擁護するがゆえに移民を排撃する、という主張を外向けには打ち出している (Beitz, 2013)。現代のポピュリズムもまた、「解放と抑圧」の二つの顔を同時に持っているのである。

本論文では、以上の問題を念頭に置きつつ、「二つの論理」を持つポピュリズムとデモクラシーとのアンビヴァレントな関係を問うことで、現代デモクラシーにおいてポピュリズムがどのような意味を持ちうるのか、考えてみたい。

ポピュリズム研究に新境地を開いた政治学者のカノヴァンによれば、「ポピュリズムは、デモクラシーの後を影のようについてくる」という。デモクラシーの成立と発展こそが、ポピュリズムの苗床となったとすれば、ポピュリズムなきデモクラシーは、ありえないのであろうか。本論文が、「ポスト・デモクラシー」の時代に突入

したといわれる現代における、「デモクラシーの逆説」の問題と解決の糸口を明らかにできれば幸いである。

一・ポピュリズムの定義

そもそもポピュリズムとは何かをめぐっては、さまざまな立場がある。そこでまず、ポピュリズムの定義を整理しよう。大まかに分けて、二種類の定義がある。

第一の定義は、固定的な支持基盤を超え、幅広く国民に直接訴える政治スタイルをポピュリズムととらえる定義である。この立場をとる論者としては、政治学者の大嶽秀夫（二〇〇三、二〇〇八）や吉田徹（二〇一一）などが挙げられる。たとえば大嶽秀夫は、ポピュリズムを政治指導者による「政党や議會を迂回して、有権者に直接訴えかける政治手法」として述べる（大嶽、二〇〇八、六）。また吉田徹は、「国民に訴えるレトリックを駆使して変革を追い求めるカリスマ的な政治スタイル」をポピュリズムとする（吉田、二〇一一、一四）。吉田によれば、ポピュリズム政治家とは、それまでの政治スタイルに変化をもたらし、斬新な政治手法を採用することで、国民に幅広くアピールすることに成功した指導者たちのことである。吉田がそのようなポピュリズムの主な例として挙げ、分析するのは、日本の中曽根政治、イギリスのサッチャリズム、イタリアのベルルスコーニ、フランスのサルコジ政権などである。

吉田によれば、ポピュリズムとは、近年の伝統的産業基盤の変化や個人主義化の進展といった社会変化を受けて、既存の政治の枠組みでは包摂できない人々の支持を集めるために、政治の側から発明されたスタイルである。そもそも二〇世紀後半の先進国では、階層・階級が政党の基盤であり、「相対的に静態的で固定的な政治」が基調をなしていた。ヨーロッパがそうであったことはよく知られているが、日本においても、自民党は農民や経営

者層、社会党は労働者層を代表することで、政党はその基盤を安定的に確保することができた。しかし今や、生産関係からなる社会関係に忠誠心をいざく人々は減少しており、そのような既成の社会関係から外れた人々の支持を集めるためには、ポピュリズムのスタイルが必須とされる。政治は多かれ少なかれ、ポピュリズム的たらしめるを得ない、というのである（同書、二七）。なお日本では、新聞をはじめとするジャーナリズムにおいても、ポピュリズムをこのような「指導者が大衆に直接訴える政治」の意味に用いることが多い。

第二の定義は、「人民」の立場から既成政治やエリートを批判する政治運動をポピュリズムととらえる定義である。ポピュリズム研究者として名高いカノヴァンらがこの定義を採り、日本でも、野田昌吾、島田幸典、古賀光生らがこれに近い。すなわちポピュリズムとは、政治変革をめざす勢力が、既成の権力構造やエリート層（および社会の支配的な価値観）を批判し、「人民」に訴えてその主張の実現を目指す運動」であるとされる（Canovan, 1999; Mudde and Kaltwasser, 2012a; 野田, 2013; 島田, 2011; 古賀, 2013）。つまりでは「エリート」や「特権層」と、「人民」（あるいは「国民」や「市民」）の二項対立が想定される。そして「人民」は「善」とされる一方、エリートは人民をないがしろにする遠い存在、「悪」として描かれる。この定義をとる場合にポピュリズムの例として挙げられるのは、フランスの国民戦線、オーストリアの自由党などをはじめとする、いわゆるポピュリズム政党である。近年の政治学では、この定義を採る立場が多いように見受けられる。

先述のタガートは、「人民の本拠地」としての「中核地 (heartland)」をポピュリズム概念の基礎に置く、やや独自の論理構成をとっているものの、同質的で一体と観念される「人民」をポピュリズムの重要な構成要素としてとらえ、その担い手としてポピュリズム政党を念頭に置いている点では、この系譜に属するとみていいだろう（Taggart, 2000）。

以上のように二通りの定義があるが、大まかに言えば、前者はリーダーの政治戦略・政治手法としてのポピュリズムに注目しているのに対し、後者は政治運動としてのポピュリズムに重点を置く。そのためこの二つの定義については、いずれかが正しい定義であるというものではなく、また、相互に排他的な定義であるとも限らない（実際、大嶽秀夫や吉田徹のいずれもが、「エリート批判」としてのポピュリズムについても言及している）。むしろ分析対象の違いに応じて、ポピュリズムの定義が異なることもありえるだろう。

そこで本論文においては、後者の定義、すなわち、「エリートと人民」の対比を軸とする、政治運動としてのポピュリズムの定義に基づくこととしたい。

その選択の最大の理由は、後者におけるポピュリズムにおいて、本論文の主題であるポピュリズムとデモクラシーの間の緊張関係が、より先鋭的な形で表れていることである。前者の定義を採る場合、主たる分析対象は、既成の有力政党のリーダーのポピュリスト的政治スタイルである。ベルスコニの場合を除けば、吉田の著書で中心的に扱われている事例は、いずれも既成の保守政党において、ポピュリスト的政治スタイルが採用された事例である（吉田、二〇一一）。しかし、サルコジらが旧来の保守エリートと異なるアウトサイダー的由来を持っていたとしても、また、メディアを積極的に活用し、「ストーリー」を売り出す新しい手法を活用していたとしても、それらはいずれも有力な保守政党の枠内で登場した、幅広く国民に訴える新たな政治スタイルの問題である。そのため、リーダーが交代すれば、その党はポピュリスト的な傾向を弱め、従来路線に復する場合もある。そうだとすれば、この場合のポピュリズムは、現代デモクラシーの変容を示す重要な現象であることは確かであるものの、デモクラシーへの根源的な挑戦とまではいえないであろう。なお、サッチャーなどをポピュリズムに含める主張に対しては、ポピュリズムの概念が無限定的に拡大することを懸念する主張もある（Torcuato, 1997.

188)。

それに対し、後者の定義の場合、分析対象は主として各国のポピュリズム政党となる。ポピュリズム政党においては、既成の政治体制のあり方が根本的に批判され、既成政党は既得権益にすぎる存在として断罪される。またポピュリズム政党の多くは「非民主的」政党として既成政党に拒否され、連立相手としての可能性も封じられる。しかしポピュリズム政党はその追及の手を緩めることはなく、むしろ自らこそ真に「民主的」存在であり、人民の支持を受けた政党として位置付ける。ここではポピュリズムは、直接民主主義的な要求を突きつけることで、それまで自明とされてきた代議制民主主義を揺るがせ、その価値を問い直す異端児としての役割を担っている。またリーダー個人のカリスマ的アピール力に依存するところは多いとはいえ、現実にはリーダーが変わっても、ポピュリズム政党のあり方は基本的に継続する。タガートが的確に述べるように、代議政治の枠内で議論することよりも、代議政治そのものに対する反発が、ポピュリズムの根底にある (Taggart, 2000, 113) このようにポピュリズムとデモクラシーとの間にある鋭い緊張関係の存在にかんがみて、ここでは、後者の定義に従うことにしたい。

二. ポピュリズムの特徴

次に、この定義を前提としたうえで、ポピュリズムの特徴を考えてみよう。

第一の特徴は、ポピュリズムの主張における、「人民」「人々」の中心性である。ポピュリズム政党は、自らが「人民」を直接代表するものであると説明して正統化することで、広い支持の獲得を試みる。カノヴァンは、ポピュリズムにおけるその「人民」の特徴を、次の三つに分類して説明する (Canovan, 1999)。

一つめは、「普通の人々 ordinary people」である。政治エリートやメディア、高学歴層などの「特権層」と異なり、むしろ「特権層」によって無視されてきた「普通の人々」が、ポピュリズム政党の念頭に置く「人民」である。これらの人々は、発言が取り上げられることは少なくとも、実は多数を占めるサイレント・マジョリティ silent majority であり、ポピュリズム政党は、その意見や不満を代弁する政党であると自らを主張する。そもそもポピュリズムにおける理解では、「普通の人びと」には「健全な人間理解」が備わっているのであって、腐敗したエリート層の発想に勝る。その「健全な人間理解」を「ストリートに政治に反映させ」ることが、ポピュリズム政党の役割であるとされるのである（野田、二〇一三、一三）

二つめは、「一体的な人民 united people」である。ポピュリズム政党は、特定の団体や階級ではなく、主権者たる国民、人民を代表すると主張する。党派的对立や部分利益を超えた、一体的な人民を観念したうえで、個別利益を求めて争う既成政党、既成政治家と異なり、人民の全体利益を代表する存在として、自らを表象するのである。この人民の一体性を前提とする点でポピュリズムは、古賀光生が指摘するように、民意が多様性であるのみならず「多元主義」の対極に位置するといえよう（古賀、二〇一三、三八一）。

三つめは、「われわれ人民」 our people である。この場合の「われわれ」は、何らかの同質的な特徴を共有する人々を意味し、それ以外の人々と「われわれ」を区別する。すなわち、「国民」や主流の民族集団を「人民」とみなして優先する一方、外国人や民族的・宗教的マイノリティは「よそ者」として、批判の対象となる。この場合の「よそ者」は社会的弱者であるとは限らず、外国資本やグローバルエリートなども含むことがある。

ポピュリズムの第二の特徴として、「人民」重視の裏返しとしてのエリート批判がある。政治・経済のみならず、社会的・文化的にも一握りのエリートが支配をかためていることを前提とし、人民の「健全な意思」を無視

する、それら「腐敗したエリート」の支配が批判される。そのさい重視されるのが、「タブー」破りである。リベラルなエリート間の「談合」によって抑え込まれ、「タブー」化したアジェンダ、たとえば移民における犯罪の問題などが声高に告発される。なお、ポピュリズムにおいては代議制や官僚制・司法制度をはじめとする政治行政制度への不信が強いが、それは、これらの諸制度が「人民の意志」の実現を阻害する、エリートの牙城とみられていることに拠るところが大きい。

第三の特徴は、いわゆる「カリスマ的リーダー」の存在である。ポピュリズム政党が必然的にカリスマを必要とするわけではないものの、ポピュリズム政治においては、既成政治・既成政党と距離を置き、民衆と直接コミュニケーションを取る指導者に対する期待が大きい。手続きが重視され、専門用語が飛び交う議会政治や官僚制と異なり、カリスマ的リーダーは、人々の声を直接くみ取り、それを明確な言葉で端的に表現し、その実現のために既成の政治行政制度に立ち向かう人物として描かれる。特に選挙におけるリーダーの役割は決定的である。党内手続きやポリティカル・コレクトネス（政治的正しさ）といった政治的配慮に縛られ、明確な主張を述べることに躊躇しがちな既成の政治家と異なり、ポピュリズム政党のリーダーは菌に衣着せぬ発言で物議をかもしつつ、既成の政治に「民衆の声」をぶつけ、喝采を浴びる。

ポピュリズムの特徴として最後に挙げるべきは、そのイデオロギーにおける「薄さ」である。しばしば指摘されるように、ポピュリズムを、その具体的な政策内容で定義することはきわめて難しい。たとえば一九八〇年代から九〇年代にかけて西欧諸国で勢力を伸ばしたポピュリズム政党は、当初は福祉国家を批判して経済的自由主義を主張する傾向が強かったが、それ以後はグローバル化批判の立場から、むしろ福祉国家擁護の論陣を張る傾向にある。またラテンアメリカに目を転ずれば、かつては積極的な国家介入、保護主義、社会立法の制定などが

ポピュリズムの中心的な主張だったが、一九八〇年代以降のポピュリズムでは、政策志向は大きく変容した。ポピュリズムの特徴はまさにその政治的態様にあるのであって、具体的な政策内容でポピュリズムを特徴づけることはできない（Weyland 2001）。支配エリートの持つイデオロギーや価値観が変われば、ポピュリズムの主張もそれに対応して合わせ鏡のように変わるのである。

三．ポピュリズムとデモクラシー

(1) 「本質的に」民主的？

「日本人には民主主義が根付いていない。民主主義が国民に根付いていなかったら政治なんて良くならないし、政治が良くならなければ日本も良くならない。住民にも本気の住民投票を経験してもらわないと民主主義は変わらない」（『朝日新聞』二〇一四年三月二七日期刊）

文献注

次に、本論文の中心的なテーマである、ポピュリズムとデモクラシーの関係について検討してみよう。

先に述べたように、ポピュリズムをデモクラシーに敵対的な政治イデオロギーとし、ポピュリズム政党を反民主主義的な政党ととみなす見方は今も強い。ポピュリズムは「民主主義の病理」「討議ではなく喝采を優先」「カリスマ指導者の独裁」などと理解されることが多く、いわゆるデモクラシー論でも、正面から検討の対象とされないのが普通である。またヨーロッパの文脈では、ポピュリズム政党は右派政党であることが多く、極右由来のポピュリズムも少なくないことから、ポピュリズムはデモクラシーに対して敵対的・批判的であるとの見方も強

い。

しかしポピュリズムの主張の多くは、実はデモクラシーの理念そのものと重なる面が多い。ミュデとカルトワッセルが述べるところでは、少なくとも理論的には、人民主権と多数決制を擁護するポピュリズムは、「本質的に」民主的である (Mudde and Kaltwasser, 2012a, 16-17)。たとえばポピュリズム政党においては、国民投票や国民発案を積極的に主張する傾向がある。オーストリア自由党は、国民投票の広範な導入、首長の直接選挙などを主張し、フランスの国民戦線も、国民投票や比例代表制導入を通じて国民の意思の反映を主張してきた。またスイス国民党は、国民投票の制度を積極的に活用し、しばしば成功を収めている (Beitz, 2013)。このような直接民主主義的諸制度は、まさにデモクラシーの本来のあり方に関わるものであり、「反民主主義」と一概に言うことはできないだろう。

現在、新右翼と位置付けられることの多い西欧のポピュリズムでは、民主主義や議会主義は基本的な前提とされており、暴力行動を是認する、いわゆる「極右」の「過激主義」とは明らかに異なっている。ポピュリストの多くは、少なくとも主張においては、「真の民主主義者」を自任し、人民peopleを代表する存在と自らを位置づけている。そのようにみると、各国のポピュリズム政党が挑戦を企てるのは、民主主義そのものというよりは、代議制の一側面に他ならない。島田幸典が的確に指摘するように、むしろ、市民の要求を実現する回路をポピュリズム政党が真剣に実現しようとしているとみなされることで、ポピュリズム政党の主張が妥当性・正統性を獲得している面もある (島田、二〇一一、四―五)。ポピュリズムは、まさにデモクラシーの存在そのものによって生み出されたともいえる (Mudde and Kaltwasser, 2012a, 17)。

なお「日本人には民主主義が根付いていない」という冒頭の引用は、橋下徹大阪市長の発言である。現代日本

の代表的なポピュリズム政治家とも目される橋下は、しばしば、「民主主義」をもちだして自らの主張を根拠づける。「民主主義」を前面に出して住民投票の実現を訴える彼の政治スタイルは、従来の保守政治家とは大きく異なるものであり、それゆえに支持者は保守層を超えて拡がり、また「進歩的」とされる著名人の支持も一定程度得ることができたといえる。

しかしそれでは、なぜポピュリズムをめぐり、正反対の解釈が成り立つのだろうか。

その背景にあるのは、近代デモクラシーを支える二つの原理の間にある、緊張関係である。

山本圭が説明するように、近代デモクラシーには二つの説明（解釈）、すなわち「立憲主義的解釈」と「ポピュリズム的解釈」がある。立憲主義的解釈は、端的にいえば、法の支配、個人的自由の尊重、議会制に基づく権力制限をはじめとする権力抑制を重視する立場であり、「自由主義」的な解釈ともいえるだろう。他方、ポピュリズム的解釈とは、人民の意志の実現の重視、統治者と被治者の一致、直接民主主義の導入など、「民主主義」的要素を前面に出す立場である。この二つの解釈のあいだには究極的には緊張関係があり、二つの解釈のうち、いずれをとるかでポピュリズムへの評価が変わる。近代デモクラシーにおける自由主義の伝統を擁護する者はポピュリズムに警戒的であり、民主主義の伝統を擁護する者は、ポピュリズムに「真の」民主主義を見出すだろう、と山本は述べている（山本、二〇二二、二七四）

この区別は、ポピュリズムに関するカノヴァンの画期的な論文「デモクラシーの二つの顔」におけるデモクラシーの二つの区分にも対応している（Canovan, 1999）。彼女は「実務型のpragmatic」デモクラシーと、「救済型のredemptive」デモクラシーの二つのデモクラシーを分ける。実務型のデモクラシーにおいては、ルールや制度の設定を通して紛争の解決を図ることが重視され、政治家や官僚らによる、日常のルーティン的な政治行政手

続きが中心を占める。これに対し救済型のデモクラシーにおいては、主権者たる人民の活動を通して「より良き世界」をめざすことが必要とされ、制度やルールを超えた人民の直接参加が重視される、という。そして実務型のデモクラシーが優位に立ち、救済型のデモクラシーがないがしろにされると、民衆の「疎外感」が広がり、その差を埋めようとしてポピュリズムが支持を広げる。ポピュリズムは職業政治家や官僚、利益団体によって遠いところに行ってしまった政治の在り方を変え、人々の声を直接政治に反映することを説くことで、人々の共感をえるのである。

デモクラシーにこの「実務型」と「救済型」の「二つの顔」があるとすれば、どちらの要素もデモクラシーにとっては欠くことができない。彼女は言う。「デモクラシーを純粹に実務型に解釈することに逃げ込む試みは、幻想に終わる。なぜなら、実務型システムとしてのデモクラシーの権力と正統性は、少なくとも部分的には、その救済的な要素に基づくものであり続けるからだ。このことは常に、ポピュリズムの発生する余地を与えるだろう。ポピュリズムは、デモクラシーの後を影のようについてくる」(Canovan, 1999, 16)

このようにポピュリズムとデモクラシーの関わりをみると、ポピュリズムはデモクラシーを否定するものというよりは、むしろその一つの重要な側面、すなわち民衆の参加を通じた「よりよき政治」を積極的に目指す試みと密接なつながりがあることがわかる。

(2) ポピュリズムとラディカル・デモクラシー

このことは、ポピュリズムといわゆるラディカル・デモクラシーとの関係を探ってみることで、一層明らかとなるだろう。

ラディカル・デモクラシーとは、近年の「新しい社会運動」や多文化主義、参加民主主義、討議デモクラシー論など、デモクラシーの深化を求める多様な運動・思想を指す。政治的な左右軸でいえば「左翼」に属する主張であることが多く、一見すると右翼的傾向の強い最近のポピュリズムの主張とは、左右の両極にある。

しかし実は、両者には共通点も多い（山本、二〇一二）。多様な運動や経路を用いて人々の政治参加を促すラディカル・デモクラシーとポピュリズムは、代議制民主主義の機能不全を批判し、人々の直接的な参加による既存の政治の限界の克服を目指す点で、意外な一致を見せる。エリートではなく、草の根の人々（the people at the grassroots）の望みを実現をめざすという点で、ラディカル・デモクラシーの議論はポピュリズムに接近をみせている（Canovan, 1999, 15）。両派はいずれも、近代デモクラシーにおける「民主主義的」伝統を強調することで、既存の政治エリートによる支配を批判し、民衆の自己統治の回復を求める立場に立っているものであって、批判する対象や、一般の人々に対する「期待」という点で、共通の土俵の上に立っているといえる。

もちろん、具体的な主張の内容を見れば、やはり両者は大きく異なっており、その点で基本的に相容れない政治イデオロギーである、とみることも可能である。しかし近年は、西欧の新右翼ポピュリズム政党においても、イスラム批判という文脈で語られるものではあるが、男女平等や性的少数者擁護という点で、むしろ進歩的と見える主張も出されている。たとえばフランスの国民戦線を率いるマリヌ・ルペンとは、かつての国民戦線が色濃く持っていた「極右」色の払拭に努め、女性や性的マイノリティの権利を擁護する立場から移民批判を展開している（畑山、二〇二三）。両者の間の溝は、思いのほか狭まっているのである。

グローバル化の進展による国民国家の「空洞化」と政策的自立性の低下、組織社会の弱体化と既成政党の「カルテル政党化」のもとで、従来の政治の在り方に対する人々の距離感はかつてないほど高まっている。そのなか

で、人々の意思を反映しようとしないうちにみえる、既存の自由民主主義体制の在り方への根本的な問題提起を突きつける点で、ポピュリズムとラディカル・デモクラシーは合わせ鏡のように、支持を広げて得ているといえる。

(3) デモクラシーの発展への「寄与」

しかしそれでは、ポピュリズムはデモクラシーの発展に寄与するものといつてよいのだろうか。この点について興味深い検討を行っているのが、ミュデとカルトワッセルの二人である。二人はポピュリズムとデモクラシーの関係をラテンアメリカとヨーロッパのポピュリズムの事例から多角的に検討したうえで、ポピュリズムにはデモクラシーを促進する要素が確かに存在するものの、その関係はしばしば両義的である、と論ずる。ポピュリズムはデモクラシーの発展を促す方向で働くこともあれば、デモクラシーへの脅威として作用することもある、というのである (Mudde and Kaltwasser, 2012a)。

まず、デモクラシーの発展を促進する面についてみてみよう。

第一に、ポピュリズムは、政治から排除されてきた周縁的集団の政治参加を促進することで、デモクラシーの発展に寄与することができる。特にこの点は、民主化の初期段階においては重要であり、権威主義的な統治エリート支配に對抗し、自由かつ公正な選挙を実現するうえで、ポピュリズムの果たした役割は大きい。また、デモクラシーを実現した諸国においても、エリートによってないがしろにされていると感じる人々の意思を表出する機会を与えることができる。「サイレント・マジョリティ」に対し、デモクラシーへの参加の機会を提供するのがポピュリズムであるともいえるだろう。

第二に、ポピュリズムは従来の階級をはじめとする社会的クリーヴィッジを超えた政治・社会的連合を形成させるとともに、そのための新しいイデオロギーを提供する。それによって政党システムや政治代表をめぐるダイナミズムが生まれ、政治的なイノベーションが可能となるという。

第三に、ポピュリズムは「政治」そのものの復権を促す。すなわち重要な課題を経済や司法の場にゆだねるのではなく、政治の場に引き出すことで、民主的アカウンタビリティの回復を促すことになる。またそれは、政治というものの持つ対立的な側面を呼び起こすことで、世論や社会運動の活性化を促すこととなる。

このようにポピュリズムは、人々の「参加」と「包摂」を促進することでデモクラシーの実現に寄与するのみならず、すでに実現したデモクラシーをさらに発展させること、すなわち「デモクラシーを民主化する」うえでも、重要な意義を持つというのである。

しかし他方、ポピュリズムはデモクラシーの発展を阻害する面も持つ。

第一に、ポピュリズムは、「人民」の意思を重視する一方、権力分立、抑制と均衡といった立憲主義の原則を軽視する傾向がある。立憲主義において重要な「手続き」は、人民の意志の実現を阻害するものとして批判される。特にそこで問題となるのは、多数派原則を重視するあまり、弱者・マイノリティの権利が無視される傾向にあることである。

第二に、敵と味方を峻別する発想が強いポピュリズムによって、政治的妥協や合意の可能性が狭められる一方、政治的対立・紛争が促され、ポピュリズム対アンチ・ポピュリズムといった新たなクリーヴィッジが生まれる可能性がある。

第三に、ポピュリズムは政治を人民投票的なあり方に変えてしまうことで、政党や議会といった団体・制度や、

司法機関などの非政治的機関の権限を制約し、「良き統治」を妨げる危険がある。

このようにポピュリズムは、人々の「参加」と「包摂」を促進する一方、権限の集中を図ることで、「公的異議申立てpublic contestation」を弱体化させる可能性がある。ポピュリズムは「デモクラシー」自体に親和的であっても、「リベラル・デモクラシー」とは緊張関係がある。総体としてみれば、デモクラシーの発展に寄与するかどうかは場合によることになる。

では、どのような場合にポピュリズムがデモクラシーの発展に寄与し、どのような場合にデモクラシーに脅威として作用するのだろうか。

ミューデとカルトワッセルが注目するのが、ポピュリズム政党の置かれた文脈である。具体的には、①ポピュリズム政党の出現した国において、デモクラシーが固定化しているのか、それとも固定化していないのか、そして②ポピュリズム政党が与党として政権を握るのか、野党として批判勢力にとどまるのか、という二つの条件によって、ポピュリズム政党がデモクラシーの質に与える影響が大きく変わるといえる。

まず、野党としてのポピュリズム政党の存在は、排除されてきた社会集団の参加を促し、かつ既成政党に緊張感を与えることで、デモクラシーの質を高める方向に作用する。たとえばベルギーでは、ポピュリズム政党の出現と躍進によって、既成政党が有権者の志向に敏感となり、さまざまな党改革を進めることとなった。ポピュリズム政党は有権者の不満を既成政党に見せつけることによって、「ベルギー政治における安全弁として」機能した面があるのである (de Lange and Akkerman, 2012, 41)。特に、安定したデモクラシーにおいては、ポピュリズム政党の出現はデモクラシーの一種の活性化をもたらす効果があるという。

他方、ポピュリズム政党が政権を獲得した場合、特にそれが安定的なデモクラシーを実現していない国におい

て生じた場合には、ポピュリズム政党はデモクラシーに対する脅威として立ち現れる。とりわけポピュリズム政党が権力の座に着いた場合には、立憲主義を否定して権威主義的統治を断行することで、むしろデモクラシーの質を貶める危険があるという。その典型例が、クーデターにより憲法を停止したベルーのフジモリ政権である。とくにラテンアメリカのポピュリズムの場合には、多様な階層を背景とする「包摂的」な運動である一方、政権を獲得した暁には「民衆の意思」を背景に権力の濫用を頻繁に行う可能性も高く、デモクラシーを促すものとはならない、というのである。

なお、デモクラシーが定着した国の場合には、ポピュリズム政党が与党となった場合でも、デモクラシーそのものが危機に陥るとはいえないとされている。

四．ポピュリズムへの対応

それでは、ポピュリズムがデモクラシーに対して持つこの両義的な影響を踏まえると、ポピュリズム政党にどう対処することが望ましいのか。とりわけ、既成の政治勢力は、ポピュリズム政党にどう対応すればいいのだろうか。

既成勢力による対応戦略については、以下の四パターンが見出される (Mudde and Kaltwasser, 2012c; Peinka, 2013)。

第一のパターンは、「孤立化isolation」である。既成政党がポピュリズム政党と協力関係を結ぶことや、ともに連立政権を構成することは、原理的に否定される。この場合、ポピュリズム政党は、デモクラシーの一アクターとしての存在自体を否定される。フランスの国民戦線、ベルギーのフラームス・ベラングに対する対応が、

これに該当する。しかしこの対応方法は、ポピュリズム政党をデモクラシーと相いれない「悪」と規定している点で一種の善悪二元論であり、既成政党をまとめて批判するポピュリズム政党の主張の裏返しでもある。その結果、ポピュリズム政党を排除しつつ、実はその主張に強い説得力を与えるものとなるであろう。また既成政党においても、ポピュリズム政党との連立を「可能性」として残しておくことで、政権交渉で有利な立場に立とうという「誘惑」にさらされることになる。

第二のパターンは、「非正統化delegitimizing」あるいは「対決confrontation」である。この場合、既成勢力は、ポピュリズム勢力の正統性を全面的に否定し、場合によっては、積極的に攻撃を仕掛ける。ドイツでは極右政党が違法化されてきたし、ヴェネズエラでは、既成政治エリートらはポピュリズム政権として成立したチャベス政権を批判し、ついには軍事クーデターに訴えて政権の転覆を図ることとなった。

第一、第二のパターンでは既成勢力がポピュリズムに敵対的であるのに対し、第三、第四のパターンでは、既成勢力はむしろポピュリズムに融和的、あるいは親和的である。

第三のパターンは、「適応adaptation」あるいは「抱きつみembracing」である。この場合、既成勢力はポピュリズム政党の正統性を一定程度承認したうえで、このポピュリズム政党の挑戦を踏まえ、自己改革に努めることになる。このことは結果として、既成政治に対する人々の不満を和らげることを通じ、ときとしてポピュリズム政党の周縁化を促すという効果も持つ。オーストリアで国民党のとった戦略はまさにこれに該当し、ポピュリズム政党である自由党と連立を組むことで、むしろ自党の政治的主導権を回復することに成功したという。ポピュリズム政党のアピールは、「ひとたび政権の一翼を担うと弱まってしまう」のである (Mouffe, 2005, 70)。

第四のパターンは、「社会化socialization」である。ポピュリズム勢力を否認せず、デモクラシーのアクターと

して認める点は「適応」と共通しているが、「社会化」の場合、より積極的にポピュリズム勢力に働きかけ、その変質を促す点が特徴的である。すなわち「社会化」においては、既成勢力はポピュリズム勢力を既存の政治的エスタブリッシュメントの中に包含することで、ポピュリズムをリベラル・デモクラシーの枠内に収めていくことがめざされる。実例としては、やはりオーストリアにおいて、連立政権のもとでポピュリズム政党が内部分裂を起こし、勢力をそがれたことが挙げられる。

このようにみると、単純にポピュリズム政党を批判し、排除するのみでは、却ってその「正統性」にお墨付きを与える結果に終わり、問題は何ら解決しないことがわかる。しかし他方、その取り込みを図って連立に引き入れることも、安易な企てであろう。ミュデらが示すように、ポピュリズム政党が与党になってもデモクラシーそのものを脅かすことがないための条件は、デモクラシー自体への信認が確立していることである。その条件が満たされないままポピュリズム政党を与党に引き入れ、「社会化」を図ることは、デモクラシーにとって大いなるリスクといわねばならない。ポピュリズム政党を迎える既成政党の側にも、相応の覚悟と戦略が必要となる。またスイス国民党のように、連合政権の与党の一つがポピュリズム政党に転換した場合には、「抱きこみ」は意味をなさないだろう (Pelinka, 2013, 19)。ポピュリズム政党への対応には、万能の処方箋はない。

おわりに

ポピュリズムは、「ディナー・パーティーにおける泥酔客」のような存在だという (Mudde and Kaltwasser, 2012c)。上品なディナー・パーティーに現れた、なりふり構わず叫ぶ泥酔客。招くべからざる人物。その場の和やかな雰囲気気を乱し、居並ぶ人々が眉をひそめる存在。しかしその客の叫ぶ言葉は、時として、出席者が決して口にしない

公然の秘密に触れることで、人々を内心どきりとさせる。その客は、ずかずかとタブーに踏み込み、隠されていた欺瞞をあばく存在でもあるのだ。

デモクラシーという品の良いパーティに現れた、ポピュリズムという泥酔客。パーティ客の多くは、この泥酔客を歓迎しないだろう。ましてや手を取って、ディナーへと導こうとはしないだろう。しかしポピュリズムの出現を通じて、現代のデモクラシーというパーティは、その抱える本質的な矛盾をあらわにしたとはいえないだろうか。シヤンタル・ムフが指摘するように、現代デモクラシーの抱える問題に真摯に向きあおうとしないのであれば、不満は持続し、「より暴力的な表現方法をとる可能性」さえある (Mouffe, 2005, 70)。この厄介な人物をどう遇すべきか。まさに今、デモクラシーの真価が問われているのである。

【参考文献】

- Betz, Hans-Georg, 2013, "Mosques, Minarets, Burgas and Other Essential Threats: The Populist Right's Campaign against Islam in Western Europe," in Ruth Wodak, Majid KhosraviNik and Brigitte Mral eds., *Right-Wing Populism in Europe: Politics and Discourse*, London: Bloomsbury, pp. 71-87.
- Canovan, Margaret, 1999, "Trust the People! Populism and the Two Faces of Democracy," *Political Studies* Vol. 47, no. 1, 1999, pp. 2-16.
- De Lange, Sarah L. and Akkerman, Tjiske, 2012, "Populist Parties in Belgium: A Case of Hegemonic Liberal Democracy?," in Cas Mudde and Cristóbal Rovira Kaltwasser eds., *Populism in Europe and Americas: Threat or Corrective for Democracy?*, Cambridge: Cambridge University Press, 2012.
- Mouffe, Chantal, 2005, "The 'End of Politics' and the Challenge of Right-Wing Populism", in F. Panizza ed., *Populism and the*

Mirror of Democracy. London: Verso, pp. 50-71.

Mudde, Cas and Cristóbal Rovira Kaltwasser eds., 2012a. *Populism in Europe and Americas: Threat or Corrective for Democracy?* Cambridge: Cambridge University Press, 2012.

Mudde, Cas and Cristóbal Rovira Kaltwasser, 2012b, "Populism and (liberal) Democracy: A Framework for Analysis," in Cas Mudde and Cristóbal Rovira Kaltwasser eds., *Populism in Europe and Americas: Threat or Corrective for Democracy?* Cambridge: Cambridge University Press, pp. 1-26.

Mudde, Cas and Cristóbal Rovira Kaltwasser, 2012c, "Populism: Corrective and Threat to Democracy," in Cas Mudde and Cristóbal Rovira Kaltwasser eds., *Populism in Europe and Americas: Threat or Corrective for Democracy?* Cambridge: Cambridge University Press, pp. 205-222.

Panizza, Francisco, 2005, "Introduction: Populism and the Mirror of Democracy," in F. Panizza ed., *Populism and the Mirror of Democracy*. London: Verso, pp. 1-31.

Pelinka, Anton, 2013, "Right-Wing Populism: Concept and Typology," in Ruth Wodak, Majid Khosravi-Nik and Brigitte Mral eds., *Right-Wing Populism in Europe: Politics and Discourse*. London: Bloomsbury, pp. 3-22.

Taggart, Paul, 2000, *Populism*. Buckingham: Open University Press.

Torcuato, S. Di Tella, 1997, "Populism into the Twenty-first Century", *Government and Opposition*, Vol. 34, no. 2, pp. 187-200.

Weyland, Kurt, 2001, "Clarifying a Contested Concept: Populism in the Study of Latin American Politics," *Comparative Politics*, Vol. 34, no. 1, pp. 1-22.

大嶽秀夫、二〇〇三、『日本型ポピュリズム—政治への期待と幻滅』中公新書。

大嶽秀夫、二〇〇八、「ポピュリズムの比較研究に向けて」『レヴァイアサン』四二号、六—八ページ。

古賀光生「戦略・組織・動員—右翼ポピュリスト政党の政策転換と党組織（一）」『国家学会雑誌』一二八巻五・六号、二〇一三年、三七—四三七ページ。

島田幸典、二〇一七、「ナショナル・ポピュリズムとリベラル・デモクラシー—比較分析と理論研究のために—」河原祐馬・島

name of book or magazine is shown in
italics
For a magazine,

田幸典・玉田芳史編『移民と政治―ナショナル・ポピュリズムの国際比較』昭和堂、一一二五ページ。

島田幸典・木村幹編、二〇〇九、『ポピュリズム・民主主義・政治指導―制度的変動期の比較政治学』(MINERYA比較政治学叢書) ミネルヴァ書房。

杉田敦、二〇一三、『政治的思考』岩波新書。

高橋進・石田徹編、二〇一三、『ポピュリズム時代のデモクラシー―ヨーロッパからの考察』法律文化社。

土倉莞爾、二〇一四、『二〇一三年参議院選挙と現代日本の政治状況に関する一考察』『関西大学法学編集』第六三巻第五号、一―四〇ページ。

野田昌吾、二〇一三、『デモクラシーの現在とポピュリズム』高橋進・石田徹編『ポピュリズム時代のデモクラシー―ヨーロッパからの考察』法律文化社、三―二四ページ。

畑山敏夫、二〇一三、『マリヌ・ルペンと新しい国民戦線―「右翼ポピュリズム」とフランスのデモクラシー』高橋進・石田徹編『ポピュリズム時代のデモクラシー―ヨーロッパからの考察』法律文化社、七五―一二五ページ。

水島治郎、二〇一二、『反転する福祉国家―オランダモデルの光と影』岩波書店。

宮本太郎、二〇一三、『社会的包摂の政治学』ミネルヴァ書房。

山本圭、二〇一二、『ポピュリズムの民主主義的効用―ラディカル・デモクラシー論の知見から』日本政治学会編『現代日本の団体政治』(年報政治学二〇一二Ⅱ) 木鐸社、二六七―二八七ページ。

吉田徹、二〇一一、『ポピュリズムを考える―民主主義への再入門』NHKブックス。